

長 砂 古 墳 群

1987年3月

総社市教育委員会

序

古代吉備の中心として栄えた本市には、数多くの貴重な文化財が残されています。その中でも特に埋蔵文化財の量は全国的に見ても多い所であると思います。

貴重な遺跡が多く所在する本市にとりまして、これらと調和したまちづくりを進めることが、本市の責務であり、私たち市民の責務であると考えます。一つ一つの遺跡が古代吉備を解明する貴重なものであり、その保護には特に慎重に対処しておるところであります。

しかし、社会情勢の変化とともに、地域開発の必要性が生じておりますが、開発と文化財の保護の接点は非常に難しい問題であります。

本報告書の遺跡も、民間企業による住宅地開発の計画地にあり、幾度となく協議を重ねた結果、やむなく発掘調査をして記録保存を図ることとなったものです。

発掘調査の結果、五世紀前半の小古墳ということが判明いたしました。

本報告書が、考古学の資料として少しでも役立てば幸いです。

発掘調査にあたっては、葵開発㈱をはじめ多くの方々に多大なご援助をいただきました。厚くお礼申し上げます。

昭和62年3月

総社市教育委員会

教育長 浅 沼 力

例 言

1. この報告書は、あおいハイツ住宅用地造成に伴い、葵開発株式会社から委託をうけて、総社市教育委員会が実施した「長砂古墳群」の発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は村上幸雄が担当し、文化係職員谷山雅彦、高田明人の助力を得て、昭和61年5月22日から6月27日まで実施した。
3. 出土遺物の整理は、村上敏子の協力を得て社会教育課服部収蔵庫にて行い、報告書作成後は同所に保管している。
4. 本報告書の執筆、編集は村上幸雄が行った。
なお付載は池田次郎岡山理科大学教授より玉稿をいただいた。
5. この報告書の高度値は海拔高であり、方位は磁北である。
6. 第1図の地形図は、国土地理院発行の50,000分の1の地図（岡山北部）を、その他の地形図は総社市発行のものを複製したものである。
7. この報告書に関係する実測図、写真、遺物等は、服部収蔵庫で保管している。

目 次

序 文

例 言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査にいたる経過	1
第2節 調査の体制	2
第2章 地理的歴史的環境	2
第3章 調査の経過	5
第4章 調査の概要	8
第1節 位置と環境	8
第2節 長砂8号墳	10
第3節 長砂10号墳	14
付 載 長砂8号・10号墳出土の人骨	22

表 目 次

長砂10号墳第1主体出土玉類計測表	21
-------------------------	----

図 目 次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 周辺の遺跡分布図 (S=1/50,000)	3
第3図 長砂古墳群および周辺古墳分布図 (S=1/8,000)	9
第4図 長砂4号墳墳丘測量図 (S=1/400)	10
第5図 長砂8・10号墳調査前の墳丘 (S=1/400)	11
第6図 長砂8号墳調査後の墳丘 (S=1/150) と断面 (S=1/120)	12
第7図 長砂8号墳主体部 (S=1/30)	13

第8図	出土遺物	14
第9図	長砂10号墳調査後の墳丘 (S=1/200)	14
第10図	長砂10号墳丘断面 (S=1/120)	15
第11図	長砂10号墳第1主体 (S=1/30)	16
第12図	第1主体出土玉類1	17
第13図	第1主体出土玉類2	18
第14図	第2主体 (S=1/20)	19
第15図	第2主体出土土器	19

図版目次

図版1	1. 長砂2号墳(長砂の石棺) 2. 長砂4号墳	23
図版2	1. 長砂5号墳 2. 長砂古墳群遠望	24
図版3	1. 長砂8・10号墳遠景(東から) 2. 墳丘の西半分を削平された8号墳	25
図版4	1. 伐根により荒れた10号墳の墳丘 2. 10号墳遠景(西から)	26
図版5	1. 8号墳調査前の墳丘(南東から) 2. 墳丘断面(南西から)	27
図版6	1. 東トレンチ墳丘断面 2. 箱式石棺検出状態(西から)	28
図版7	1. 箱式石棺掘り上がり状態 2. 鉄鎌と出土状態	29
図版8	1. 枕石と歯の検出状態 2. 調査後の8号墳遠景(東から)	30
図版9	1. 調査後の8号墳全景(南東から) 2. 調査後の8号墳近景(北から)	31
図版10	1. 調査後破壊される8号墳 2. 10号墳第1主体検出状態(西から)	32
図版11	1. 10号墳第1主体の箱式石棺 2. 蓋石除去後の箱式石棺	33
図版12	頭骨と玉類出土状態	34
図版13	1. 第1主体(右)と第2主体(左) 2. 西からみた第1・第2主体	35
図版14	1. 第2主体検出状態(西から) 2. 間隙を塞いだ破片除去後の第2主体	36
図版15	1. 調査後の主体部(北西から) 2. 調査後の全景(北から)	37
図版16	1. 第1主体出土の玉類 2. 第2主体出土土器	38
図版17	10号墳第1主体頭骨と8号墳出土の歯	39

第1章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経過

田中内閣の発足と、日本列島改造論の提唱以来、列島内は都市近郊はいうに及ばず、山間部にいたるまで大規模開発の波が押し寄せることとなった。

本市は吉備高原の南端に位置し、主として高梁川下流域と新本川流域の平地部に市街地が広がる。背後には低平な丘陵群が群在し、気候風土など自然条件に恵まれた地にある。岡山、倉敷両市にも近く、交通も比較的至便で、開発側からみると格好な地域であり、改造ブームに前後してゴルフ場、住宅団地などがあいついで造成された。しかし、本市はかつて古代吉備の中核として栄えた地であり、多くの文化遺産が埋蔵されている。従って開発と文化財の保存調整が大きな課題として論議をよぶこととなった。

市内久代の長砂地域は、高梁川の支流新本川左岸の下流域に近く、正木山南斜面に所在する丘陵群が、こうした開発の候補地として狙上りのぼるのも、また時勢の流れであったかもしれない。昭和40年代中頃から、幾種かの計画内容の変容を受けつつ、やがて高梁川以西では最大の住宅団地造成予定地として登場することとなった。造成予定地は25haにおよび、約470戸の住宅用地ほかの造成計画である。計画の具体化と



第1図 遺跡の位置

ともに、当然のことながら文化財の保存対応が必要となり、昭和49年には分布調査が実施された。調査によると、計画地のほぼ中央に位置する藤原池を挟んで、東西の尾根上に低平な墳丘をもつ前期の古墳及び古墳の可能性のある高まりがいくつか確認されている。しかし幸いなことに、それらは尾根上に所在し、開発予定地外にあたることから、その保存協議は比較的順調に進められた。

だが、計画が具体化してから、いっこうに進行しなかったのは用地買収が難航したためであり、その解決には後にみるごとく昭和46年の

用買着手以来、実に15年を要すこととなった。

第2節 調査の体制

発掘調査は、英開発株式会社による経費の全額負担により、総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導助言のもとに実施することになった。昭和60年8月に造成地内の文化財が推定される地域の確認調査を実施し、ついで長砂8、10号墳の調査に着手しようとした。しかし前記2墳の所在する尾根の用地買収が難航し、翌年5月になって再び調査が可能になった。

なお調査にあたっては、英開発株式会社には経費の負担をはじめとして各種の便宜をはかっていただいた。また造成工事を担当した鯛熊谷組、鯛四俵工務店には墳丘測量の一部について労を煩わした。記して厚く謝意を表します。

調査組織

社会教育課（文化係）

課長 樋口文男

課長補佐 村上幸雄（調査担当）

主事 小田 求（庶務担当）

主事 谷山雅彦（調査担当）

主事 高田明人（調査担当）

作業員 横田武夫、牧野 悟、平田 実、加藤光枝、梶井明雄、河崎秀夫、永田 豊、大横寿騎太、平田里美、平田喜久子、山本百恵

なお発掘調査にあたって、下記の方々から温かい御指導と御教示を得たことを記し、厚くお礼申し上げます。

河本 清、葛原克人、平井 勝、高橋 護

第2章 地理的歴史的環境

総社市は、県南西部に位置する気候、風土に恵まれた小都市である。県下三大河川の一つ高梁川が、市域の中心部を北から南流して瀬戸内に注ぎ、東域は足守川で画される。北方は吉備高原の南縁にあたり、標高400m前後の緩やかな山並みが中国山地へとつづいている。一方南は標高200m前後の低丘陵列が東西につらなる。この眼下にひろがる総社平野こそ、古代吉備



1. 桑原麻寺 2. 上沼古墳 3. 桑大墳古墳 4. 桑茶臼山古墳 5. 金子石塔塚古墳
6. 長砂2号墳 7. 横田才の鼻古墳 8. 砂子山古墳群 9. 一倉遺跡 10. 立坂墳丘墓
11. 藤原製鉄遺跡 12. 板井砂奥製鉄遺跡 13. 久代大塚古墳 14. 伊与部山墳丘墓

第2図 周辺の遺跡分布図 (S = 1/50,000)

の中核地として歴史の主舞台に幾たびも顔をのぞかせる地域である。高梁川とその分流が造出したこの平野内には、幾条もの河道が走り、その周辺各所に微高地群を形成している。これら

の敷高地こそ先人の生活の場であり、生産活動の拠点となったところである。

さて高梁川以西の市内西城（川西地域）に眼を転じよう。そこには高梁川の支流で西から東流する全長約11kmの新本川が造出した小平野が流域部に見られるが、その広さは高梁川以東の総社平野には比ぶべくもない。この新本川流域小平野の北には、標高 300～500mのやや険阻な山並みが連なるが、南は標高 200m弱の緩く低い山々となる。これらの地域は、地質的には全山が花崗岩で構成され、良質な真砂土を産するため各所で虫喰い状態の採土地となっており、赤茶けた地肌をさらしている。

さてこの川西地域への先人の足跡はいつ頃からしるされたのであろうか。

新本川右岸の約63haに及び新本地域圃場整備事業に伴う発掘調査で、これまで不明確であった同地域における集落跡の様相が少しずつ明らかにされた。調査結果によると、旧石器時代に遡るものはないが、新本稲井田の長瀬遺跡（註1）で縄文時代早期の、同小原遺跡で後期の土器片が出土しているから、およそ7000～8000年前にはその足跡を認めることができる。しかし、これらの地に開発の機がふるわれるのは弥生時代になってからである。水稲栽培に代表される同時代は、狩猟、採集を主とした前時代と比べ、生活様式に大きな変革をもたらした。おそらく拠点集落からの分村という形で同地域への進出は、当初谷水田の経営という形で進められたのであろう。下倉の塩田遺跡、新本の長瀬・小原・一倉遺跡（註2）などはそうした典型例であろう。これらの遺跡のうち一倉遺跡の溝から出土した小形鉢は、入墨を施したヘラ描き人面文をもつもので、愛知黒塚遺跡（註3）、善通寺市山遊遺跡（註4）、岡山市鹿田遺跡（註5）例と酷似しており、呪的要素の強い当時の生活習俗をしのばせるものである。また特殊器台で飾られた弥生時代の首長墓である墳丘墓は、吉備とくに備前地域を中心にみられるが、新本立板弥生墳丘墓（註6）は立板型特殊器台形土器の名祖遺跡として著名である。農業生産の進展と政治的結合がこうした首長層を生みだしていったのであろう。やがて首長層は各水系単位に丘陵上に古墳を築造する古墳時代を迎える。秦上沼古墳（註7）は三角縁神獸鏡を出土した県内で古式の古墳であり、同じく全長56mの秦大塚古墳（註8）、また全長約38mの茶臼山古墳（註9）などは新本川下流域の首長墳である。新本川からやがて小平野にかかる山田の小丘陵上に所在する砂子山古墳群は全長35～50mの三基の前方後円墳（註10）を含むもので、古墳時代前期におけるこの地域の系譜的な首長墳と考えられる。後期の古墳は横穴式石室に代表される。川西地域にみられる横穴式石室は、普通規模程度をやや下まわるものが大半である。わずかに大形の石室をもつものとして、玄室長 6.3m、幅 2.25mの久代の久代大塚古墳（註11）があげられる。また秦の金子石塔塚古墳（註12）は、右袖の横穴式石室墳で全長 11.65m、玄室長 5.5m、幅 1.9mを測り県下でも五墳しかない貝殻石灰岩（浪形石）製の割抜き式家形石棺をもつものの一つである。終末期と考えられている長砂 2号墳（註13）は、県内唯一

の横口式石棺をもつもので、その整美さは古墳時代の終末を飾るにふさわしい。やがて古代国家への胎動は古墳の築造を終らせるが、こうした中で地方豪族はそのエネルギーを新たに寺院建立にむける。高梁川右岸に所在する秦原廃寺（註14）は、飛鳥期創建とされる県内最古の寺院跡であり、渡米系氏族秦氏の影響下に造院されたものと考えられている。川西地域では、古代寺院址は秦原廃寺のみであり、栢寺廃寺（註15）、備中国分二寺（註16）、備中国府など古代寺院址や官衙の集中する総社平野とは国家形成期から確立期の時点においても川西地域の劣性はいなめないようである。

第3章 調査の経過

長砂古墳群の調査は、住宅団地造成計画から約15年を経過して開始されることとなった。既述したごとく、殆んど古墳は現状保存が可能となったが、8・10号墳は1985年8月の踏査時に新規に発見された古墳である。この時点の調査の目的は、8・10号墳の所在する同一尾根の南約100mに所在するとされる2号墳が切土部にあたり、また古墳とするにはいくつかの疑念もあるため、墳形、規模等の確認を目的としたものである。2号墳は尾根上に位置していたが、墳丘らしいたかまりは凹凸が著しく、しかも雑草におおわれた状態であった。このため東西方向にトレンチを設け、掘り下げて土層観察を行ったところ、畑地の残土を寄せ集めた部分が、墳丘状の高まりを呈していることが判明した。8・10号墳はこの時点の踏査で新規に発見したものである。しかし、それは立木伐開前の状態での観察であり、しかも墳丘は低平でそれらを古墳と断ずるには明確さを欠くものであった。8号墳は墳丘の西側が土探りと思われる掘削痕がみられたものの、やや墳丘らしいたかまりをもち、周溝らしい凹部も確認された。しかし、10号墳は尾根の平坦部の先端に位置しているが、墳丘らしいたかまりは少なく、そのたかまりが人為的なものなのか、単なる自然地形の反映なのか、いずれとも決めかねる状態であった。同様なたかまりは、北側にも隣接してみられた。このため、小トレンチにより遺構を確認することとし、周溝状の凹部を検出した。従って南側のたかまりを10号墳、隣接する北側のたかまりを9号墳とし、さらに北約45mにあるものを8号墳と称することとした。しかしこの時点では、当該地は未買収地であり、調査ができないため買収をまって調査を開始することとした。

調査は、当該墳の所在地の用地買収の見通しがついたという事業者からの連絡で、昭和61年1月20日から開始することとなった。しかしまだ用地買収は完了していないため、調査墳の所在する尾根から谷をはさんだ西の尾根の確認調査から行うこととなった。この尾根上には、3・4・7号墳が所在しており、4・7号墳は用地境であるため現状保存となっていたが、3

号墳は切土部分にあっていた。しかし何回かの踏査を行っても3号墳の所在地とされる地点に古墳を確認することはできず、このため確認調査を実施した次第である。調査の結果、3号墳を確認することはできず、いくつかのそれらしい高まりはトレンチ調査の結果、自然地形の変化と判明した。従って3号墳は存在しないものと判断し欠番扱いとすることとした。この時点の調査では、84.3mの三角点の尾根頂部から、北へつづく尾根上の一部の、古墳らしい高まりをもつ地点にも数本のトレンチを入れたが、古墳とする確証は得られなかった。また尾根上から斜面にかけて集落址の存在も考えられるため、いくつかの地点でトレンチ調査を行ったが、それを裏付ける遺構、遺物は検出できなかった。

調査を開始して数日を経過したころ、事業者から調査墳の所在地を含む一帯の用地買収が難航しており、早期解決が困難なことを告げられた。このためやむなく調査を1月25日で打ち切り撤収した。

4月7日になって、あおい団地造成計画地の東方に位置する森、山崎に所在する全長38mの前方後円墳茶臼山古墳周辺が伐開されていたため、撮影のため総社市西公民館に赴き、撮影を行った。この時、西方に位置する造成地内の10号墳周辺の異変に気づき、現地へ直行した。

8号墳は工事用重機により墳丘西半を削平されており、10号墳周辺は伐根のためかなり荒れた状態となっていた。急ぎ葵開発(株)の現地事務所へ赴いて状況を説明し、現地を現況のまま保存すること、事務所長に今後の対応を協議のため、直ちに教育委員会へ来庁するよう要望したのち、県教育委員会文化課へ状況を報告した。午後、事業者と対応を協議し、嚴重抗議を行うと共に、現地にロープ張りをして工事関係者の立入禁止措置を講じた。この件に関しては、のちに願末書の提出をうけた。

こうした経過ののち5月になって漸く用地買収が終り、22日から発掘調査を再開する運びとなった。

日誌抄

昭和61年1月20日	調査開始。器材搬入、4号墳の下刈り、清掃。
21日	5・6号墳下刈り、清掃。
22日	尾根上の古墳らしい推定地に確認のためのトレンチ調査。
23日	前日のトレンチ調査継続。三角点所在地周辺及び3号墳推定地へ確認のトレンチ。
24日	4号墳墳丘測量及び墳端確認のトレンチ調査。
25日	前日の作業継続。8・10号墳域の用買難航のため、調査を中断し引上げ。
4月7日	8・10号墳の異変発見、対応協議。
5月22日	調査再開。8～10号墳の墳丘現況測量。

- 23日 調査前の状況撮影。
- 26日 発掘開始。8号墳断面清掃，P2・3間にトレンチ。周溝確認、埋葬主体は箱式石棺と判明。
- 27日 P2・3間のトレンチ掘り下げ。削平された西半側の周溝掘り下げ。
- 6月2日 8～10号墳表土除去。8号墳箱式石棺の蓋石一枚残存。
- 3日 8号墳表土除去作業。清掃後撮影。墓坑掘り方と箱式石棺検出。墳丘東西方向にトレンチを設定し掘り下げ。円墳とするには周溝のめぐり方に疑問が残るためサブトレンチ掘り下げ。
- 4日 周溝掘り下げの結果、一辺約13mの方墳と判明。
- 5日 箱式石棺東西トレンチ撮影。棺内掘り下げ。棺内に枕石と歯検出。棺外から鉄鎌出土。
- 6日 箱式石棺の裏込め掘り下げ。
- 7日 全景撮影。箱式石棺実測。10号墳表土層除去。
- 8日 箱式石棺実測。
- 9日 8号墳掘り上がり後の墳丘測量。10号墳南北トレンチ設定、掘り下げ。箱式石棺材らしい石材検出。
- 10日 8号墳箱式石棺掘り方実測。8号墳の調査完了。10号墳の埋葬主体検出。箱式石棺と判明。墳丘を8等分し、各区にトレンチ。墳丘規模は約10mと判明。
- 11日 各区トレンチ掘り下げ。東西トレンチのうち東トレンチで土師器出土。第2主体。箱式石棺蓋石実測。
- 12日 東西トレンチ掘り下げ継続。箱式石棺実測。蓋石除去。
- 13日 箱式石棺実測。14～17日、雨のため作業中止。
- 18日 蓋石除去。頭蓋骨残存。
- 19日 棺内掘り下げ。頭骨のほか歯残存。石製模造品の勾玉、管玉、小玉など多数出土。
- 20日 周溝掘り下げ。箱式石棺の掘り方掘り下げ、実測。東トレンチ出土の土師器は2個体。
- 21日 箱式石棺、第2主体実測。人骨、玉類取り上げ。
- 22日 箱式石棺実測。23日 雨。
- 24日 周溝掘り下げ継続。箱式石棺実測継続。
- 25日 周溝掘り下げ継続。墳丘盛土除去。第2主体取り上げ。

- 26日 周溝掘り下げ継続。掘り上がり後の全景撮影。器材撤収。
27日 掘り上がり後の墳丘測量。調査完了。

第4章 調査の概要

第1節 位置と環境

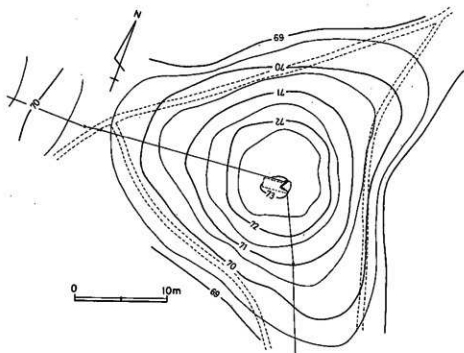
長砂古墳群は、総社市久代5,271番地ほかに所在する。

高梁川左岸には、標高301mの正木山があり、北斜面はやや急峻な山並みが吉備高原へと続くが、南斜面には、幾条もの尾根が派生している。住宅団地計画地はこうした尾根のうち麓波池を挟む東西二つの尾根を含むもので、その範囲は25haに及んでいる。東の尾根に所在するのを藤原古墳群、西のそれを長砂古墳群と呼称している。一部を除き、低平な墳丘をもつ前期の群集小墳が殆んどである。藤原古墳群は、すべて計画地外であり、現状のままであるので、長砂古墳群についてその概要をみることにする。

1号墳は計画地外の尾根端部にあり、破壊されているが小形の横穴式石室墳である。2号墳は俗に長砂の石棺とよばれており、県内唯一の横口式石棺である。墳丘は一辺9m前後の方墳と考えられており、龜山石産の割抜式石棺を主体とする。石棺は内法長203cm、幅86cm、深さ57cmで、小口の一方を開口部とした重厚、整美な棺である。これに屋根形とされる蓋(註17)がのる。蓋は長2.45m、幅1.3m、高さ1.2mで、前底部は先年の大雨で崩落し崖状となっている。本墳も計画地外である。3号墳については調査にいたる経過の項でみたごとく誤認である。4号墳は南北にのびる尾根が、さらに西に小さく派生した尾根上にあり、墳丘上が計画地と民有地との境界になっている。このため協議を行い法面を一部設計変更して現状保存を図っている。造出しをもつらしい円墳で径22m、高さ3mを測る。内部主体は竪穴式石室で、昭和初期に盗掘を受けている。現状は石室内が埋没しており、規模等については不明である。5号墳は4号墳の西約50mに所在する。南緩斜面にある径約10mの低小な円墳で中央に盗掘痕が穿たれている。6号墳は5号墳の西約100mの尾根上に比定されているが、トレンチ調査においても周辺地形の高まりのみで古墳を認めることはできなかった。7号墳も計画地外である。以上のごとく、長砂古墳群とよばれる一群は、1、2号墳が後期のもののほか、4号墳がやや規模が大きいが他はいずれも低平な墳丘をもつ前期の古墳群である。



第3図 長砂古墳群および周辺古墳分布図 (S = 1/8,000)



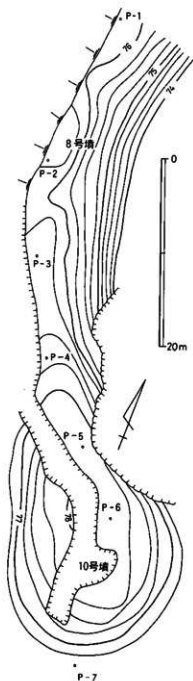
第4図 長砂4号墳丘陵測量図 (S=1/400)

第2節 長砂8号墳

1. 墳丘と周溝

本墳は、正木山南斜面から東南東にのびる尾根が、84.3mの三角点からさらに東南東に小さく派生した標高80m弱の尾根上の平坦部に位置している。馬背状のやせ尾根で東西斜面ともかなりの急斜面となっている。尾根のつけ根にあたる本墳の北西斜面は、調査前には果樹園であり、地元の古老によれば閉壟時に箱式石棺があったというから、同様な低平な古墳がもう一基存在したものと考えられる。墳丘の西半分は前述したごとく工事用重機により削平され消失している。従って発掘調査着手時には、墳丘の東半分が残存した状態であり、埋没しているが周溝らしい凹部が南側と北側に認められた。調査は掘削された断面の清掃から行い、周溝及び箱式石棺を検出した。ついで東西方向のうち、墳丘が残存する東側にトレンチを設け、さらに墳形の確認のために北東と南東にもトレンチを設定した。

基盤は風化花崗岩層で、その上層は褐色土層であり、この面で整地を行っているが、部分的には南側の周溝近くでみると風化花崗岩層にまで及んでいる部分もある。盛土は4層の淡茶



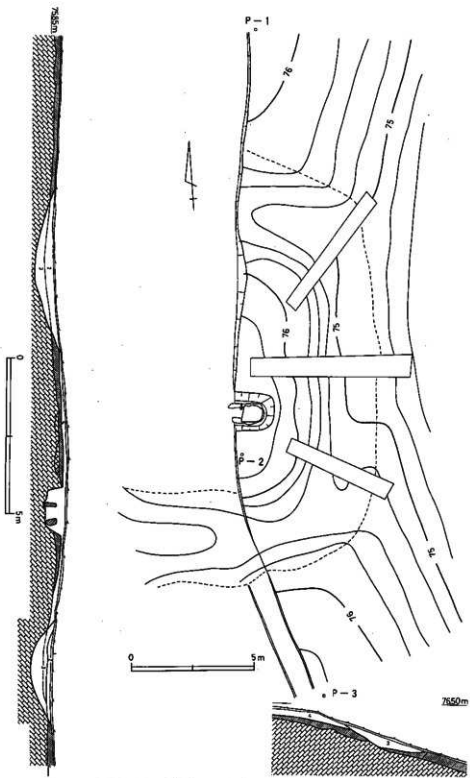
第5図 長砂8・10号墳
調査前の墳丘(S = 1/400)

褐色土のみが10~20cmの厚さで残存する。残存する墳丘高は、周溝底から約1.2m前後を測る。周溝は北と南側のみでなく斜面となる東側にもトレンチ調査で確認され、残存する墳丘のほぼ全体をめぐる事が判明した。周溝幅は北側で約5m、南側で約3.3m、東側で約2.6mを測る。削平された西半分の墳丘のうち、南側では周溝が確認されたが、北側は削平がやや深くすでに消失していた。なお墳丘、周溝からの遺物の出土はない。

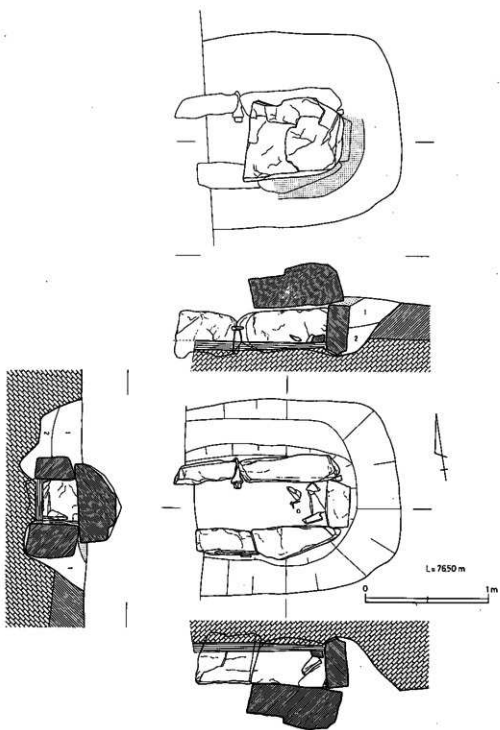
以上の状況から、本墳は尾根上に築成された一辺約13mの方墳と考えられる。

2. 埋葬主体

本墳は箱式石棺を埋葬主体とする。墳丘の中央部からわずかに南寄りに位置し、尾根走行に直交して墓域を穿っている。過半を欠失するが、残存する墓域は隅丸の長方形形状を呈し、長さ約1.7m、幅約1.5m、深さ約0.4mを測る。箱式石棺はこの墓域内の中心部よりやや南寄りに構築されており、北側は墓域底部と棺外との間に幅約20cmの平坦部を残している。各石材は、墓域底をさらに穿って立てられており、いずれもやや大形で厚みのある石材を用いている。側石は各二石が残存し、小口石を挟んでたてられる。隙間の充填も小石を用いて丁寧に行っており、残存する一枚の蓋石との間隙には粘土が一部で検出され、密封した状態をうかがわせる。内法長約120cm、幅約35cm前後を測る。重厚な印象をうける箱式石棺である。棺内は褐色土を約5cmほど敷いて整えており、棺内の深さは30cm弱である。小口石寄りには、小割石を用いて枕石としており、歯十数本が検出された。他に棺内には人骨及び遺物は認められなかった。他方の小口部を欠失するが、残存側では東枕の頭位をもつこととなる。付載で詳言されているが、被葬者は壮前半の男性の可能性が推考されている。



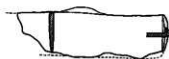
第6図 長砂8号墳調査後の墳丘(S=1/150)と断面(S=1/120)



第7図 長砂8号墳主体部 (S=1/30)

棺外出土の遺物

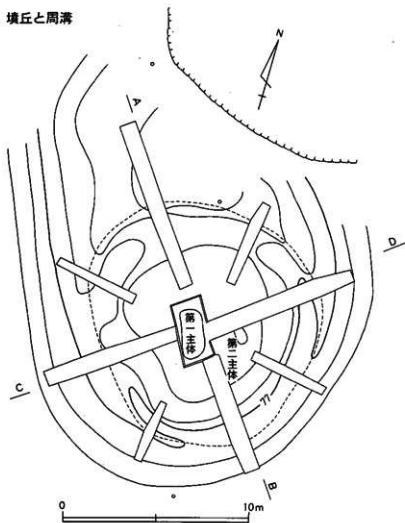
棺内には遺物は認められなかったが、棺外で鉄鎌一点が出土した。南側側石の裏込土内、側石天端高から10cmほど下部で出土したものである。残存長8cm、幅2.4cmで、一端に柄装着のための折りかえしが認められる。本墳からの出土遺物は、本品のみである。



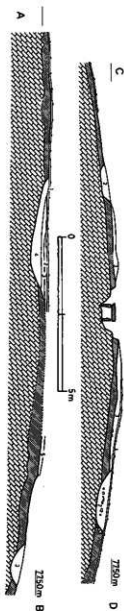
第8図 出土遺物

第3節 長砂10号墳

1. 墳丘と周溝



第9図 長砂10号墳調査後の墳丘 (S = 1/200)



第10図 長砂10号墳

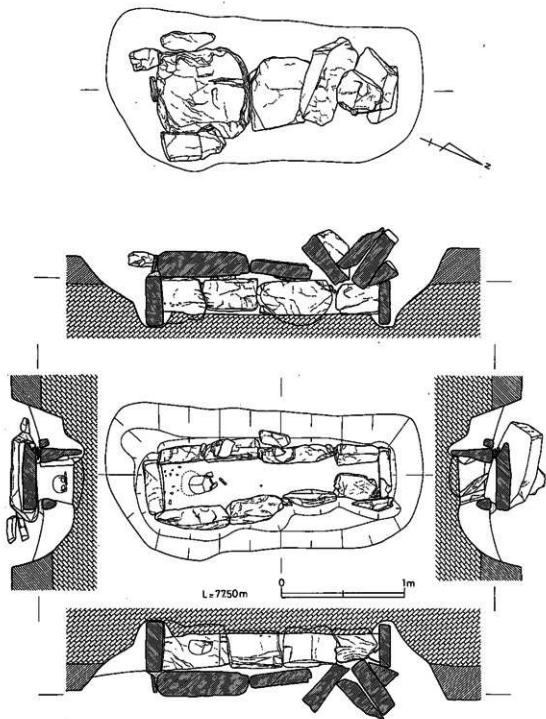
墳丘断面(S=1/120) 残存部は50cm強であり、三石目の石材と隙間充填用の小石材を用いられ充分である。蓋石相当数と棺の長さからみて、二石は石材がやや大きすぎるくらいはあるが、あるいはそれらが蓋石間の隙間の充填に用いられた可能性も否定できない。側石は両側とも四枚である。南側に比べ北側小口部寄りの石材はやや小さく、特に東側石のそれは内傾した状態となっている。小口は一端を側石の外側に、一端を内側に立てられており、両小口とも同

本墳は、8号墳から約45mほど南の尾根先端部に所在する。眼下には新本川下流域から高梁川を隔て総社平野を一望する眺望絶佳の地にある。しかし墳丘は低平で、調査前には古墳と識別するのが困難な状態を呈していた。しかし細かく観察してみると、工事用重機の伏根に伴って表土の一部から石材の一端が露出しており、ボーリング棒の探査によってさらに数個の石材の存在をうかがわせる感触を得た。調査は、尾根主軸線及びそれに直交する方向と、その中間に補助トレンチを設けた。基本土層は8号墳と同様であり、旧表面を整地したのち若干の盛土を行っている。盛土は、最も厚い部分で20cmほどが残存する。墳丘高は、CからD方向の周溝底から70~80cmを測る。周溝は尾根主軸上のA-B方向では、尾根上にある北側は幅4m近いが、斜面側の南側では1.3m位である。尾根に直交する東西斜面側のC-D方向にも周溝が認められ、また補助トレンチにおいても周溝が確認された。従って周溝は、ほぼ一巡した状態でめぐらされていたこととなる。

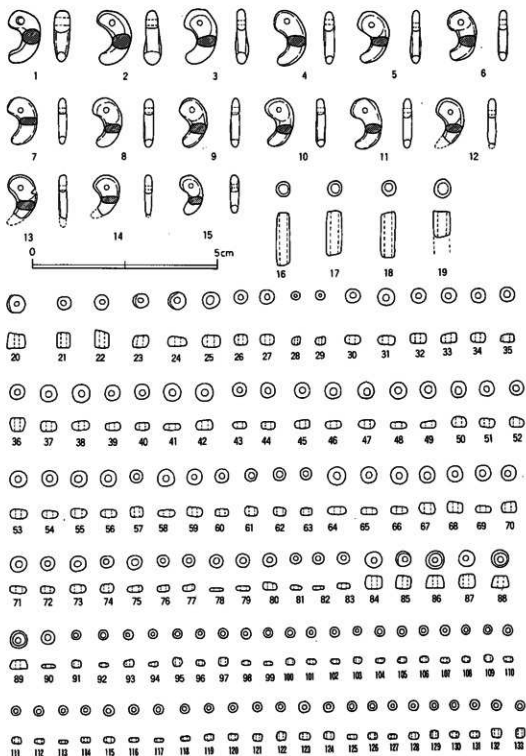
以上の調査結果から、本墳は周溝が一巡する低平な墳丘をもつ径約10mの円墳であることが判明した。

2. 埋葬主体

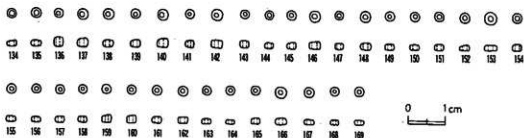
本墳には、二つの埋葬主体が認められる。墳丘のほぼ中心部に位置する第一主体は、箱式石棺である。尾根主軸上に長さ約2.6m、幅約1.1m、深さ約50cmの、短軸の一端がやや広く、他端がやや狭い墓壇を穿って、箱式石棺が構築されている。箱式石棺は、蓋部に隙間充填用のものかもしれないものを含め六枚が認められる。南寄りの蓋石は70cm角大で、厚さ約20cm、二石目は50cm角大で、厚さ約10cm前後。この両石は、検出状態から見て不動のものと考えられる。問題は内傾した残る二石である。検出状態でみるかぎり、これら石材は動かされたものと考えざるをえない。また棺内法長からみて、不動の二石を除く



第11圖 長砂10号墳第1主体 (S = 1/30)



第12图 第1主体出土玉類1



第13図 第1主体出土玉類2

じ側に同じ手法を用いている。棺底面はほぼ地山の基盤層を床面としている。側石天端と蓋石間に間隙を塞ぐ粘土が僅かに残る。棺の内法は、長さ175cm、幅は一端がやや広く40cm、他端が30cmで、深さは30cmを測る。

遺物の出土状況と遺物

箱式石棺内には、頭蓋骨が残存していた。歯を欠失していたが、頭骨は比較的よく残っていた。棺の床面は僅かに埋っておりその上に頭骨のつた状態を示していた。下顎部と考えられる骨の一部は、非常に脆くなっており、頭骨の近くで検出されたほか、歯の一部は頭骨の左上に数本が散乱した状態で検出された。被葬者は女性の可能性が高く、壮年後半と推定されている。玉類は頭骨周辺から、腹部と推定される位置、とくに右側に散乱した状態で発見された。盗掘が行われたと推定される。しかし盗掘は蓋石の一部を開け、おそらく頭蓋骨を見て驚き、慌ててそのままの状態での放置したかのごとき状況を想起させる。頭骨の残存状態からみて、盗掘の時期はあまり古い時期ではあるまい。

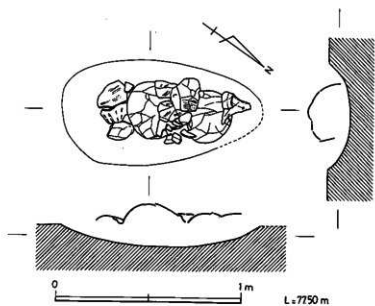
玉類は、勾玉、管玉、ガラス小玉、白玉など計169個である。

勾玉は15個を数える。全長10.25～13.9cm、幅4.25～6.0cm、厚さ1.95～2.0cm、孔径1.1～1.7cmを測る。断面はまるみをもつものから扁平なものまでさまざまである。穿孔は一方からである。材質は軟質の凝灰岩系または滑石製で色調は大半が暗灰緑色である。

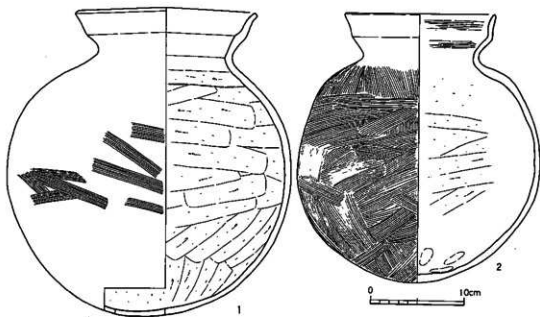
管玉は4個を数える。長10.15～13.8cm、径3.6～4.4cm、孔径1.8～2.2cmを測る。穿孔は一方から、材質は勾玉と同種である。

ガラス小玉は8点を数える。長2.15～4.6cm、径3.8～5.25cm、孔径1.2～2.1cmを測る。濃青色の一点を除き、他は空色である。なお材質は不明だが茶褐色を呈す同種のものが2点(28・29)ある。

白玉は140個を数える。長さ0.85～4.65cm、径1.65～5.2cm、孔径1.0～2.0cmを測る。形態、大きさなどかなり不揃いである。材質は滑石または滑石系のものと思われ、色調は暗灰緑色のものが多い。これらはガラス玉を除きいずれも石製模造品とされるものである。



第14图 第2主体 (S = 1 / 20)



第15图 第2主体出土土器

第2主体は土器蓋墓である。第一主体の東約2mに位置する。長軸を第一主体と同じく南北方向にもち、並列している。長径107cm、短径57cm、深さ約10cmの長楕円形の墓槽を掘り、土師器の壺2個体を割り土器1の半截分を主要部に用い、その間隙を土器2の破片で覆って蓋としたものである。規模からみて、乳幼児を葬ったものと推定される。遺物は、骨を含め、残存しない。

1は口径19cm、器高37.6cmを測る。球形の胴部、丸底で、底部は穿孔されている。口縁部は緩く外反する二重口縁で、端部はやや平坦である。内面はヘラ削り、外面は胴中央部にハケ目、口縁部から頸部にかけては内外ともヨコナデである。淡灰褐色を呈し、焼成良好である。

2は口径16cm、器高18.6cmである。ややいびつな胴部に丸底をもつ。口縁部は外反きみに直立状にたちあがる。外面は不定方向のハケ、内面は胴中央から上半がヘラ削り、頸部から口縁部にかけてはハケ目痕が残る。外面にはススが付着している。

第4節 まとめにかえて

長砂10号墳は、発掘調査の結果、径約10mの円墳で、箱式石棺と土器蓋墓の二つの主体をもつことが判明した。箱式石棺内からは頭骨と169個にのぼる勾玉、白玉などの石製模造品と小玉が出土した。第2主体の土師器の壺は、にぶい二重口縁を呈すもので、石製模造品の出土とあわせ、五世紀前半の築造と考えられよう。8号墳は一辺13mの方墳で、箱式石棺を主体とするが鉄鎌以外に出土遺物がなく、築造期は明確でないが、10号墳とさほど隔たりのない時期と考えられようか。

註

1. 谷山雅彦「長湊遺跡」『総社市史』考古資料編 1987年 総社市
2. 高田明人「一倉遺跡」『総社市史』考古資料編 1987年 総社市
3. 天野暢保「愛知県亀塚遺跡の面文土器」『考古学雑誌』67-1 1981年
4. 笹川竜一「仙遊遺跡発掘調査報告書」1986年 善通寺市教育委員会
5. 山本悦世「鹿田遺跡」『岡山県史』考古資料 1986年 岡山県
6. 近藤義郎「立坂弥生墳丘墓」『総社市史』考古資料編 1987年 総社市
7. 中田啓司「秦上沼古墳」『総社市史』考古資料編 1987年 総社市
8. 中田啓司、近藤義郎「秦大坑古墳」『総社市史』考古資料編 1987年 総社市
9. 中田啓司「秦茶臼山古墳」『総社市史』考古資料編 1987年 総社市
10. 近藤義郎、鎌木義昌「砂古山古墳群」『総社市史』考古資料編 1987年 総社市
11. 鎌木義昌、亀田修一「久代大塚古墳」『総社市史』考古資料編 1987年 総社市
12. 鎌木義昌、亀田修一「金子石塔塚古墳」『総社市史』考古資料編 1987年 総社市
13. 村上幸雄「長砂2号墳」『総社市史』考古資料編 1987年 総社市
14. 葛原克人「秦原廃寺」『総社市史』考古資料編 1987年 総社市
15. 葛原克人、岡本寛久「栢寺廃寺緊急発掘調査報告書」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書34 1979年
16. 葛原克人「備中国分僧寺跡」「備中国分寺尼寺跡」『総社市史』考古資料編 1987年 総社市
17. 永山卯三郎『吉備郡史』巻上 1937年

表 長砂10号墳 第1主体出土玉類計測表
勾玉

番号	全長	幅	厚	孔径	材	質	色	備
1	13.15	5.05	3.65	1.7	一方	凝灰岩系?	白灰色	
2	13.9	5.1	4.0	1.8		滑石系?	暗灰緑色	
3	13.9	6.0	2.8	1.2				
4	13.95	5.75	2.45	1.3				
5	13.3	5.7	2.3	1.2				
6	13.05	5.25	2.2	1.2				
7	12.9	5.2	2.0	1.2				
8	12.65	5.0	2.35	1.2				
9	12.8	5.3	2.2	1.2				
10	12.55	5.3	2.15	1.2				
11	13.2	5.3	2.35	1.2				
12	11.8	5.35	1.95	1.25				
13	10.8+α	5.6	2.1	1.2			灰緑色	
14	10.4+α	5.45	1.85	1.1				
15	10.25	4.25	2.2	1.35			暗緑色	

管玉

番号	長	径	孔径	材	質	色	備
16	13.8	3.6	1.9	一方	滑石系	暗灰色	色
17	10.15	4.15	1.8			灰色	色
18	10.22	4.25	1.8			灰色	色
19	6.3+α	4.4	2.2	一方?	凝灰岩系	灰緑色	色

ガラス玉, 白玉

番号	長	径	孔径	材	質	色	備
20	3.55	4.65	1.2	ガラス		藍青色	
21	3.8	3.8	1.4			空	
22	4.6	4.1	1.65				
23	5.15	4.5	2.1				
24	5.15	5.15	1.9				
25	3.1	5.25	1.95				
26	2.7	4.2	1.55				
27	2.55	4.55	1.65				
28	2.55	2.75	1.9			茶褐色	
29	1.85	2.85	0.95				
30	2.2	4.2	1.6			暗灰緑色	
31	2.45	5.05	1.65				
32	2.7	5.0	1.75				
33	2.7	4.5	1.5				
34	2.25	4.4	1.35				
35	2.05	4.2	1.75				
36	3.25	4.25	1.85				
37	2.4	4.15	1.55				
38	2.45	4.9	1.65				
39	2.2	4.5	1.7				
40	2.45	4.5	1.5				
41	1.65	5.1	1.65				
42	2.6	5.1	1.75				
43	2.35	4.0	1.55				
44	2.0	4.3	1.5				
45	2.7	4.65	1.7				
46	2.3	4.8	1.75				
47	2.3	4.8	1.7				
48	1.7	4.75	1.65				
49	2.25	4.8	1.65				
50	3.3	4.6	1.6				
51	3.35	4.15	1.45				
52	2.9	4.1	1.6				
53	2.35	4.65	1.6				
54	4.65	1.65	1.75				
55	2.4	4.7	1.75				
56	2.4	4.65	1.65				
57	2.6	3.6	1.8				
58	1.65	4.9	1.7				
59	2.6	4.4	1.55				
60	1.6	4.25	2.0				
61	3.85	3.55	1.7				
62	2.3	3.6	1.7				
63	2.05	3.5	1.45			暗灰色	
64	2.2	5.2	1.7			色暗緑灰	
65	1.85	4.55	1.7				
66	1.85	5.0	1.7				
67	3.0	4.8	1.8				
68	3.1	4.7	1.5				
69	2.0	4.6	1.65				
70	2.6	4.45	1.55	滑石系		暗緑灰色	
71	2.0	4.65	1.85				
72	2.0	4.2	1.85				
73	2.05	4.65	1.6				
74	2.65	3.74	1.6				
75	1.5	4.15	1.6			灰白色	
76	1.8	3.45	1.4			暗緑灰色	
77	1.7	3.85	1.7				
78	0.85	4.15	1.75				
79	1.75	4.1	1.5				

(単位 mm)

番号	長	径	孔径	材	質	色	備
80	1.9	4.2	1.75		滑石系	暗緑灰色	
81	1.15	3.85	1.45				
82	0.9	2.85	1.4				
83	1.25	3.55	1.35				
84	3.35	4.55	1.5			灰白色	
85	3.3	4.5	1.4			灰白色	
86	3.15	5.15	1.5				
87	3.4	4.55	1.4				
88	3.05	5.0	1.4				
89	2.35	4.95	1.55				
90	1.0	4.15	1.65				
91	2.65	2.75	1.2				
92	1.25	2.75	1.2			暗灰緑色	
93	2.0	2.9	1.1				
94	1.4	2.7	1.05				
95	2.15	2.8	1.1				
96	1.45	2.8	1.05				
97	2.1	2.8	1.15			灰緑色	
98	1.5	2.85	1.1			暗緑色	
99	1.45	2.6	1.15				
100	1.55	2.8	1.3				
101	1.5	2.95	1.0				
102	1.55	2.7	1.1				
103	1.9	2.6	1.05				
104	1.7	2.95	1.05				
105	1.7	2.9	1.1				
106	1.8	2.85	1.1				
107	1.65	2.8	1.1				
108	1.55	2.5	1.1				
109	1.65	2.65	1.15				
110	1.4	2.85	1.1				
111	1.7	2.8	1.2				
112	1.2	2.85	1.25				
113	1.4	2.75	1.15				
114	1.75	2.75	1.15				
115	1.6	3.1	1.2				
116	1.3	2.8	1.05				
117	1.3	2.75	1.15				
118	1.7	3.15	1.1				
119	1.9	2.75	1.15				
120	2.0	2.85	1.15				
121	1.6	2.75	1.1				
122	2.15	2.85	1.1				
123	1.8	3.3	1.1				
124	2.15	2.95	1.15				
125	1.5	2.9	1.1				
126	2.0	2.75	1.1				
127	1.4	2.75	1.15				
128	1.65	2.95	1.05				
129	1.9	2.65	1.15				
130	1.65	2.7	1.1				
131	1.8	3.0	1.1				
132	2.1	2.9	1.05				
133	2.45	2.75	1.15				
134	1.4	2.65	1.2				
135	1.45	2.8	1.1				
136	2.2	2.75	1.1				
137	2.05	3.15	1.15				
138	1.7	3.1	1.0				
139	1.65	2.95	1.05				
140	2.1	3.25	1.1				
141	1.8	2.75	1.1				
142	1.55	3.1	1.05				
143	2.05	2.65	1.15				
144	1.2	2.55	1.1				
145	1.75	2.8	1.1				
146	2.1	3.2	1.15				
147	1.8	2.55	1.15				
148	1.65	3.05	1.15				
149	1.55	2.6	1.1				
150	1.45	2.65	1.05				
151	1.55	2.8	1.1				
152	1.45	2.75	1.1				
153	1.25	3.55	1.3				
154	1.65	2.8	1.1				
155	1.4	2.85	1.1				
156	1.2	2.75	1.2				
157	1.6	2.65	1.2				
158	1.7	2.55	1.1				
159	1.8	2.75	1.1				
160	1.85	2.6	1.2				
161	1.5	2.6	1.15				
162	1.7	2.85	1.15				
163	1.3	2.85	1.1				
164	1.4	2.65	1.1				
165	1.5	2.7	1.15				
166	1.5	3.2	1.15				
167	1.5	2.95	1.1				
168	1.4	2.7	1.1				
169	1.35	2.6	1.2				

付載

長砂8号・10号墳出土の人骨

池田次郎

昭和61年春、総社市教育委員会による調査が行われた総社市久代所在の長砂8号墳および10号墳の主体部である箱式石棺内部に人骨、歯牙が遺存していた。古墳の築造年代は5世紀前半と推定されている。

8号墳

遺体の頭部が置かれていたと思われる石棺の東小口に近く、同一個体に属する上下顎歯26本が残存していた。

下顎歯は末萌出とみられる左第3大臼歯を除く15本の歯が、本来の歯列をそのままとどめているが、いずれも歯冠だけで歯根は腐蝕し消失している。上顎歯のうち左の中切歯、側切歯、犬歯、右の中切歯、犬歯、第1小臼歯はそれぞれ歯列の状態を残しているが、それ以外に左の第1小臼歯と第1大臼歯、右の第2小臼歯と第1・第2大臼歯は散乱していた。上顎歯も歯根を欠損するものが多い。

大臼歯の近遠心径、頬舌径はともに大きく、被葬者が男性であった可能性が示唆される。大臼歯の磨耗が弱いので、その死亡時年齢は壮年前半と推定される。

10号墳

石棺の南小口の近くから頭蓋骨と歯牙が検出された。

完全な前頭骨と左右頭頂骨、後頭鱗の大部分、左右側頭鱗の前方部約 $\frac{1}{2}$ 、左右蝶形骨大翼の側頭高と側頭下窩を形成する部、左右鼻骨、左右頬骨および右上顎骨の前頭突起が連結している頭蓋骨は、頭蓋底と顔面下部を大きく欠損するが、頭蓋冠はほぼ完全である。これ以外に左右側頭骨椎体の破片、下顎骨体正中部付近の内側面の小破片、および上顎左の犬歯、第1・第2小臼歯、第1大臼歯、右の中切歯、第1・第2小臼歯、下顎左右の第1・第2大臼歯と左の第1小臼歯が遺存する。

頭蓋骨は全体として小さく、眉間、眉弓の隆起が弱く、前頭結節が著明であるなど女性的特徴が強い。大臼歯の磨耗は中程度で、被葬者は壮年後半の女性であった可能性が高い。頭蓋の最大長はやや大きく、最大幅は中程度で、長幅示数(75.1)は中型の下限に入る。高径は計測できないが、かなり低く、横径長が小さい。縫合骨が左冠状縫合と左人字縫合にそれぞれ1個、右人字縫合に3個、アステリオン小骨が左側に、プテリオン骨が左右に存在する。

上顎幅は中程度で、前眼窩間幅は広く、鼻根部はいちじるしく扁平である。眼窩の高径、幅径ともに中程度で、左の眼窩示数(82.9)は中型に属し、眼窩上孔が右に1個存在する。



1. 長砂 2号墳 (長砂の石棺)



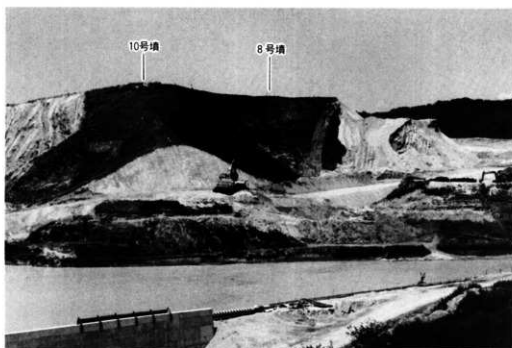
2. 長砂 4号墳



1. 長砂5号墳



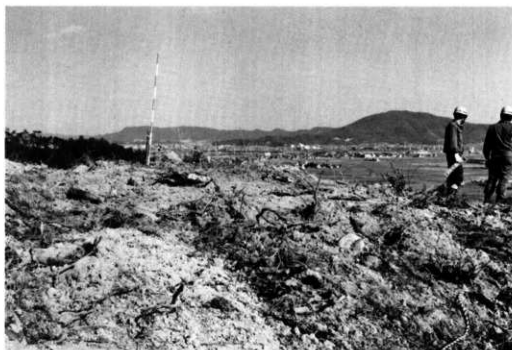
2. 長砂古墳群遠望



1. 長砂8・10号墳遠景 (東から)



2. 墳丘の西半分を削平された8号墳



1. 伐根により荒れた10号墳の墳丘



2. 10号墳遠景 (西から)



1. 8号墳調査前の墳丘（南東から）



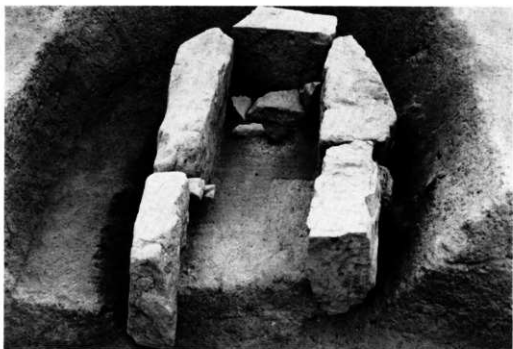
2. 墳丘断面（南西から）



1. 東トレンチ墳丘断面



2. 箱式石棺検出状態（西から）



1. 箱式石棺掘り上がり状態



2. 鉄鎌と出土状態



1. 枕石と歯の検出状態



2. 調査後の8号墳遠景 (東から)



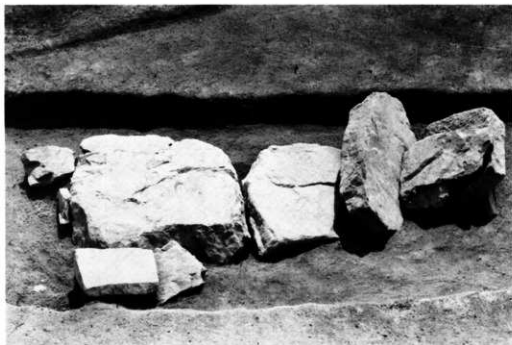
1. 調査後の8号墳全景 (南東から)



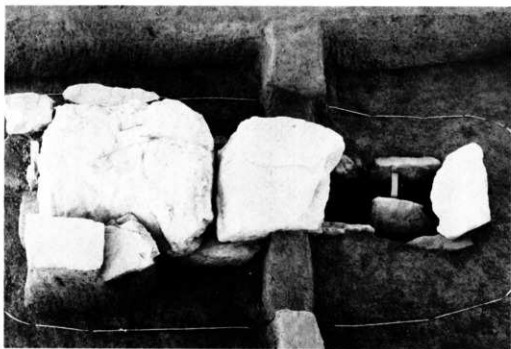
2. 調査後の8号墳近景 (北から)



1. 調査後破壊される8号墳



2. 10号墳第1主体検出状態（西から）



1. 10号墳第1主体の箱式石棺



2. 蓋石除去後の箱式石棺



頭骨と玉類の出土状態





1. 10号墳第1主体(右)と第2主体(左)



2. 西からみた第1・2主体



1. 第2主体検出状態（西から）



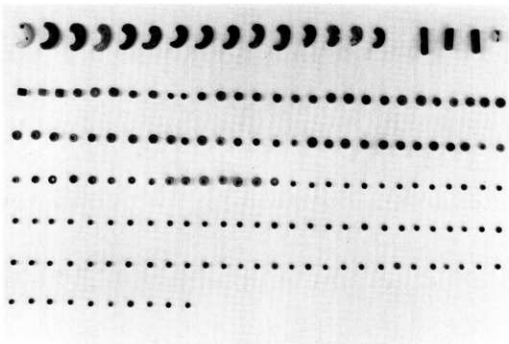
2. 間隙を塞いだ破片除去後の第2主体



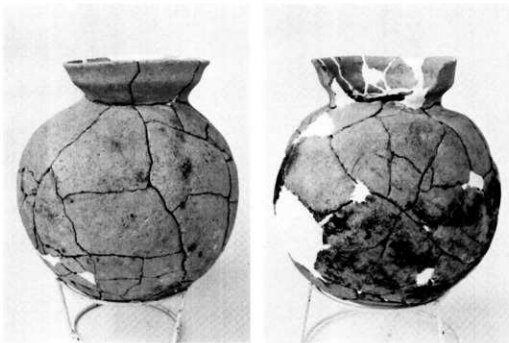
1. 調査後の主体部（北西から）



2. 調査後の全景（北から）



1. 第1主体出土の玉類



2. 第2主体出土土器



前面観



側面観



上面観

10号墳第1主体頭骨と
8号墳出土の歯

8号墳 歯



総社市埋蔵文化財発掘調査報告 5

長砂古墳群

1987年3月 印刷
1987年3月 発行

編集発行 総社市教育委員会
総社市中央1丁目1番1号

印刷 柳本印刷株式会社
総社市総社1丁目10番24号

